

法事の使い・出雲市大社町字龍

令和3年8月10日掲載

収録・解説・酒井 董美^{たによし} イラスト・福本 隆男



語り手 阿部文四郎さん
 (明治40年生まれ)
 収録・平成3年10月28日

あらすじ

あるところにお母さんと兄弟が二人おったと。そいで弟は、東六という名だった。そいでまあ睦まじく百姓をしておったが、お母さんが突然、急死したと。それで東六に、

「東六や、お寺へ行って和尚さんに拜んでもらわにやいけんけん、おまえ行って来いや」と言う。

「おら、行くけども、和尚さんでどんな格好をしとられえかて。」

「黒い着物着ちようなはつてすぐ分かあけん、その和尚さんが死にましたけん、『うちの母が死にましたけん、すぐ来て拜んでください』て頼んで来いやて。」

「はいはい」と言つて東六は一

生懸命、お寺へ行きたと。玄関のところに、鴉が二羽止まつておった。で、

「これがその和尚さんだからか」と思つて、「和尚さん、うちの母が死にましたけん、すぐ来て拜んでください」と言つたら、

「カー、カー」と言うたて

て。

「かあじやございません、母でございます。早く来てください」と言つたら、また、「カー、カー」と言つて飛んで逃げたので腹を立てて家へ帰つたと。あんちゃん「東六や、和尚さん、すぐ来なはあか」と言うたら、「いや、『カー、カー』言うて、いっそ『来う』て言わつしやらん」

「そら和尚さんだねわなあ、玄関ひやつて、障子を開けて、和尚さんが出なはりや、そのこと言わにやいけんが」

「何だい知らんが、あんちゃんが黒い着物着ちようけん、それで玄関のところの塀に止まつちよられたけん、そいでそげ言いたわて。」

「こな、どげないならんので言うて、自分が行きて、今度和尚さんに頼んでもどつたと。」

「そいじゃあ、和尚さんがおいでえけん、酒でも一杯出さないけん」というので、「東六や、後ろの二階の酒樽に酒が入れてああけん、おまえ、尻をちゃんと持つちよつてこせや、あんちゃんは上から下げえけんなあ」

「おお、なんぼでも持つちようけんなあ」と言つて、今度和尚さんがおいでるまでに兄貴が倉へ上がつて、酒を下げたと。で、

縄でいわえつけて、下げえのに、「いいか、東六や、尻持つちよれよ」「うん、せわない。持つちようけん」「せわあないか」「せわあない」。それから、そろそろそろいったら、ズドーンと落ちとる。

「こら、何のことだ。東六、おまえ、尻持つちよれんだねか。樽がめげたがな」と手言つたら、

「あんちゃん、このごとくに、死ぬうほど尻持つておおてて、自分の尻をつめて一生涯懸命に持つちよつたと。」

「やれやれ、おまえはことにならんのか」「ちいやな話です。とうとう和尚さんにも酒は出されだつたが、まあ結局、そういう弟がおつて笑つたという話ですわ。そればつかあ。」

解説

「閑敬吾『日本昔話大成』では、笑話の中の「愚か賢」に「法事の使い」としてこの話型が登録されている。各地で好んで語られているようである。

語り手の阿部文四郎さんの話では、子どもの頃、祖父から聞かされたものだったとのことだった。

(元島根大学法文学部教授)

